



第45回「おかねの作文」コンクール

思いやりの価値

静岡県・浜松市立三方原中学校 2年 荒井 佑奈

中学生になってから、私は毎月お小遣いをもらえるようになりました。母は、月初めにお小遣いを渡してくれる時必ず、

「毎日、一生懸命働いて来てくれるお父さんにちゃんとお礼を言ってね。」
と一言添えます。面倒くさいな、少ししかくれないのにと心の中では思っていました。また、私が買い物をした時のおつり数円を、部屋のテーブルにいつまでも放置していた時には、

「1円足りなくても物が買えないんだから、大切にきなさい。」
と怒られた事もありました。私は、自分で苦労して働き手に入れたお金ではないし、お金が無くて困った事もないからその価値や大切さを知らずにいました。

そんな時に、私の考えるたった1,000円が、心温まり、すごく価値のある1,000円に変わった出来事がありました。休日に母が昔の手紙を整理していた時、大切な物を見せてあげると私に折りたたんだ紙を差し出しました。それは、古い包装紙を切って作ったメモ用紙のようでした。その古くボロボロの包装紙メモの裏には、こんな言葉が書いてありました。

「タイセツにつかう、友里からもらった」

そう弱々しい字で書いてありました。私は、この紙をどうして大切にしまってあるのか聞いてみました。この紙は、母の祖母が書いたものでした。私のひいおばあさんは、私が2歳の頃亡くなり、今はお祭りの時皆で撮った写真と、私が生まれた時に私を抱いて撮った時の写真でしか顔が思い出せません。この紙は、そんなひいおばあさんが亡くなった後、家族でひいおばあさんの部屋を片付けている時に引き出しから出てきたものだそうです。古い1,000円札1枚と一緒に。母は、とても嬉しかったそうです。いつお金を渡したとか、何のためのお金だったのかは思い出せなかったようですが、ひいおばあさんを大切に始めた時の事はよく覚えているそうです。母が高校を卒業する頃、母の祖父が病気で亡くなりました。ひいおばあさんはとても





悲しみました。葬式の数日後、夜中にトイレに起きると、ひいおばあさんが仏壇の前に座って、

「早くおじいさんの所に行きたいよ。」

と泣いているのを見たそうです。その時、自分が大切にして、もっともっと長生きしてもらいたい、淋しくさせない、と心に思ったそうです。どんな事をしてあげたのかと聞くと、

「特別な事はしていないけど、いつも気に掛けてあげて、優しい態度で接していたよ。」と教えてくれました。そして、

「お金は、おばあちゃんが大好きなアメ玉と一緒に渡した時のものかな、1,000円では何も買えなかったね。」

と恥ずかしそうに笑っていました。それでもひいおばあさんが、メモを残してまで喜んでくれた事を知り、とても嬉しそうでした。私は、ひいおばあさんが、母の気持ちをとても嬉しく、有り難く思って使わずに大切にしまっておいたのだと思いました。その時の嬉しい気持ちを包装紙の裏に書いて。

私は、1,000円では欲しい物も買えない、たった1,000円と感じていた自分が恥ずかしくなりました。ひいおばあさんが残してくれた小さなメモが、家族を大切にし、人を思いやる素晴らしさと同時に、お金は使い方によって金額の大きさに関係なくすぐく価値のあるものになる事を学びました。

これから両親や祖父母からのお小遣いや、将来アルバイトをしたり、社会人になり自由に使えるお金がたくさん手に入った時もお金価値ある素晴らしいものになる事を忘れないでいたいと思います。二度と金額の大小で価値を決め付けないつもりです。お金を使う時は、自分に得られる満足感を考えて使いたいです。できれば、母のように思いやる心を添えて人を幸せな気持ちにできる事にもお金を使えるようになりたいと思います。来月、お小遣いをもらったら、心から両親に感謝を伝えようと思います。

